

学生と教員との共育的関係の継続 —ある学生の保育士としての成長を取材して—

小 竹 利 夫

Abstract:

Students enrolled in a childcare training program at a junior college, while giving assistance to children during practice teaching, can, conversely, also learn from the children. In the same way, teachers at a junior college, in teaching their students, can also learn from them. In this way, the one who is teaching and the one who is being taught can learn from each other, and can form a relationship of mutual growth. This relationship can continue even after the student has graduated and has begun working in child care.

This paper reports on one student's development as a childcare worker, and examines the relationships of mutual growth that can be seen in that process mainly between student and teacher.

キーワード：

学生、教員、保育士、受け止める、共育的關係

はじめに

保育士養成課程の学生の多くは、実習先で子ども達に対して教え、援助していく中で、逆に子ども達から教わることもあると言えます。それと同様に、我々教員も、本学で学生を教える中で、学生から教わることもあります。

このように、教える者と教わる者が互いに学び合うことで、共に育つ関係（共育的關係）を築くことができます。この共育的關係は、学生が短期大学を卒業して保育士として働き始めた後も継続します。

本稿では、かつて本学で学んだある学生が、保育士として成長していく姿を取材し、その過程で見られた学生と教員との長期に亘る共育的關係に焦点を当てて考察を試みました。

1. 実習でのエピソード

私が本学の保育士養成課程で教え始めた年の夏、幼稚園での実習を終えた2年生に、実習で心に残ったエピソードを書いてもらいました。その中で、私が感銘を受けたエピソードを一つ以下に紹介します。このエピソードを書いた学生こそが、今回、本稿を執筆するにあたり取材をさせてもらった保育士の青木沙織さんです。

気持ちに寄り添って見えたもの

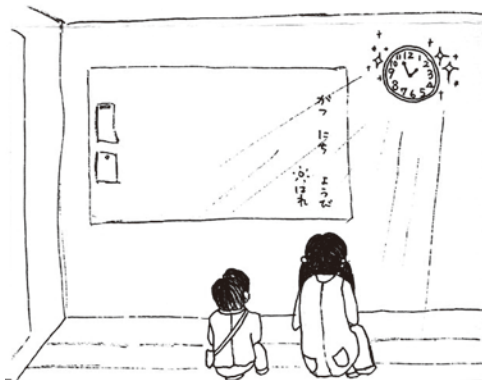
障碍がいを持っているT君（4歳）は、集団行動が上手く出来ず、すぐに教室から出て行ってしまった。

ある日、T君は帰りの会の時間に、

一人教室を飛び出し、となりの部屋へ入ってしまった。T君は立ったまま動かず、じっと時計を見ていて、私が何と声を掛けても教室に帰ろうとはしなかった。私はT君がなぜそんなに時計が気になるのか、自分の教室の時計ではだめなのか知りたくなり、T君と同じ目線の高さになるようにしゃがんでみた。すると、時計の秒針が太陽の光に反射して、1秒1秒きらきらと輝いていた。私はとても感動したと同時に、T君はこの光が好きで見とれてしまっていたのだと分かった。T君の教室では時計の場所が日陰になっていたため光がなかった。

私は「きれいだね」などと声を掛けながら少しの間T君と一緒にその光を見た。その後で「また明日も見ようね」と声を掛けると、T君は自分から教室に戻っていった。

青木 沙織



Saori Aoki

この短いエピソードの中には、人が人と繋がり豊かな心が育つためのヒントがたくさん含まれています。以下に、経過に沿って個々のやりとりが持つ意味について述べます。

1-1 行動の奥にある気持ちを理解しようとする

青木さんは、隣の教室の時計に見入るT君の姿に接して、その行為を「困った行動」と

見なして制止するのではなく、その行動の奥にある気持ちを知りたいと願い、一緒に時計を見ました。ここが、子どもの気持ちに寄り添えるかどうかの大きなポイントだったと思います。青木さんは、T君と同じ行動をすることで、T君の心の世界に近付くことができました。

1-2 気持ちに共感し、肯定的に子どもを理解する

青木さんは、時計の秒針が光に反射して輝いていることに気づき、光の美しさとT君の繊細な感性に感動しました。T君の気持ちを共感的に理解できた時、青木さんはT君を意味のある行動をする子として肯定的に理解するようになりました。

1-3 気持ちを代弁する

そして、青木さんは「きれいだね」と、その時のT君の気持ちを代弁しました。その言葉を聞いて、T君は青木さんが自分の気持ちに共感してくれたことを知り、青木さんに対する信頼や自分に対する自信を深めることができたのではないかと思います。

1-4 気持ちを受け止めてもらった子は、人の気持ちを受け止めることができる

T君が自分から教室に戻って行ったのは、満足したからとも考えられますが、T君が青木さんの気持ちを汲んで自分から教室に戻っていったとも考えられます。誰かに気持ちを受け止めてもらった経験が、人の気持ちを受け止める心を育てるのだと思います。

1-5 体験を共有する

青木さんは実習で体験したT君との係わりをエピソードとして記述しました。私がこのエピソードを読んで感動したのは、青木さんとT君の心の触れ合いを共有できたからです。体験を共有するということは、心を共有することだと思えます。

1-6 共に育つ

子どもから見れば、実習生とはいえ青木

さんは先生です。その青木さんが、T君の繊細な感性に触れることで、子どもに対する見方を広げることができました。一方、私も、大学で学生を教える仕事をしている中で、今回のように逆に学生から教わることがあります。

学生と子どもが互いに影響し合い、共に育つ関係を築くことができるように、教員と学生もまた共に育つ関係を築くことができます。そういった豊かな育ち合う関係を築く為には、先ず相手の気持ちを丁寧に受け止める姿勢が大切である事を、このエピソードは示唆しています。

上記の考察は、拙稿「実習のエピソード」(青木・小竹、2009)の原稿を書き直したものです。私はこのエピソードに出会って、学生達を書く実習のエピソードの中に子ども達のキラキラ輝く心がたくさん隠されていることに気がきました。これ以後、実習を終えた学生達を書くエピソードを、まるで宝探しをしているようなワクワクした気分です読むようになりました。そして、貴重なエピソードをより多くの方と共有したいと思い、実習エピソード報告集「心の触れ合いを求めて」(小竹、2008・2009・2010・2011・2012・2013・2014・2015・2016)を毎年学生達と作成するようになりました。

2. 就職と挫折

青木さんは本学卒業後、ある保育園に就職しました。その保育園では子ども中心の自由な保育が大切にされ、青木さんが目指す保育士の姿がそこにはありました。

しかし、青木さんが就職して間もなく、保育園の園長先生が変わりました。それまでの自由な保育から教えることに力をいれた教育的な保育に変わり、青木さんの描く保育士像とかけ離れていってしまいました。

子ども中心の自由な保育を望んでいた青木

さんは、保育園に就職してから1年半後、退職を決めました。

3. 保育への復帰

保育園を退職後、青木さんはしばらくの間、保育の仕事から離れていました。それでも、子どもの傍にいたいという気持ちは持ち続け、子どもと係わる仕事は続けていたようです。

青木さんがもう一度保育の仕事に戻るのは、退職から4年の月日が経った頃でした。彼女は後に、その頃の心境を以下のように語ってくれています。

「退職後、小さい頃からの夢だった保育の仕事をしたという気持ちはありましたが、保育園に再就職することはずっとありませんでした。それでも、結婚を控えて栃木を去る前に、もう一度だけ保育の世界に入ってみて、それでも同じだったらこの先保育の仕事はやめようと思っ、派遣会社に保育士として登録しました」

4. 「おひさま保育園」との出会い

2013年10月、青木さんは栃木県上三川町にある私立「ふざかしおひさま保育園」(以下「おひさま保育園」)に保育士として派遣されました。

「おひさま保育園」では、子どもの気持ちを大切にされた保育が行われており、青木さんが求める保育がそこにはありました。「『おひさま保育園』は、自分の保育士像を上回るとも素敵で、学べるのが沢山ありました」。彼女は「おひさま保育園」についてこのように語り、まるで水を得た魚のように、再び、生き生きと子ども達と係わることになりました。園長先生は、青木さんが働き始めた頃の印象について、「最初から子ども達の行動の意味や気持ちを考えながら保育していたので、とても感心しました」と私に話して下さいました。

彼女は2014年8月末まで、この「おひさま保育園」で保育士として働くことになりました。

5. 「おひさま保育園」での再会

2014年8月、実習中の学生を指導するために「おひさま保育園」を初めて訪問した私は、久しぶりに青木さんに再会しました。1歳の男の子を抱いて挨拶に来てくれた青木さんに前述した園長先生の言葉を伝えたとこ、小竹先生の授業を通して、子どもの行動には意味があること、そして子どもの気持ちに寄り添うことの大切さなどを教わりました」と語ってくれました。7～8年も前に教えたことを忘れずに保育してくれていたことを知り、教員として嬉しく思いました。

青木さんが語ってくれた通り、保育園を訪問中に垣間見た彼女と1歳の男の子との係わりの様子は、彼女が男の子の気持ちに寄り添い、二人の呼吸がピッタリと合っていて、得も言われぬ素敵な光景でした。その日の夜、私と青木さんは、この時の男の子との係わりについて以下のようなメールを交わしました。

小竹：今日訪問した時、青木さんがよちよち歩きの男の子とゆったり係わっている姿をちらっと見ました。歩きながら男の子が右ひじを振ると同じように振り、男の子が目を向けたり指差したりした物に同じように目を向けたり指差したりしていました。

青木：普段は0歳児クラスで保育していますが、今日は急遽1歳児クラスに入りました。あの男の子を担当している職員が早退してしまい、男の子は悲しくて大泣きしていましたが、気持ちに共感し受け止めていくうちに、次第

に私の事も受け入れてくれるようになりました。後に、指差しなどで自分の思いを伝えてきてくれるほどになりました。子どもにとって気持ちを汲み取ってもらって、安心できる心地の良いものなのですね。小竹先生の授業で教えて頂いた、“気持ちに寄り添う”ということの大切さを日々実感しています。

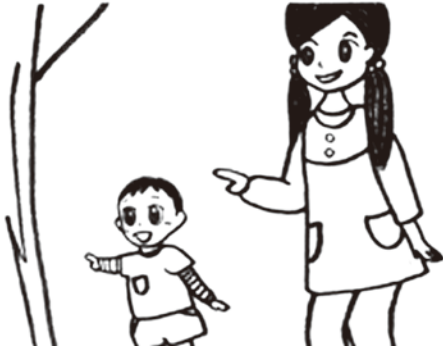
小竹：あの時園庭で、男の子は何を見て、何を指差していたのですか？それに対して青木さんは同じように見て指差しながら何と声を掛けていたのですか？

青木：男の子はアリを見つけて、「アーアー！（アリさんいたよ）」と指差して教えてくれたので、私も同じように指差し「ほんとだ！アリさんいたね。○君みたいにあんよしてる。どこに行くのかなぁ？」などと声を掛けていました。

小竹：あの時は、よちよち歩きの男の子の少し後ろを青木さんが歩いてたように見えました。意識して少し後ろを歩いているのですか？

青木：そうですね。意識していました。歩行が確立し、視界や行動範囲も広がって、男の子にとって見える世界は以前と格段に違うのでしょうか。男の子の目は本当に生き生きとしていて、「これはなんだろう？あそこにいてみたい！これ触れてみたい！」など探索心が強く感じられました。その為、彼の意思のままに行動してもらおうという思いからあの位置にいました。人は生まれた時から、きちんと意思がありますものね。それを大人の価値観で、あれをしよう！これをしよう！あそこへ行こう！などと、勝手に決めつけてしまうのは子どもにとっては窮屈で不快なのではないかと思えます。やはり子どもと接する上で大切なのは、“気持ちに寄

り添う”ことだと思って保育しています。“気持ちに寄り添う”ことだと思って保育しています。



Saori Aoki

上記のやりとりから、青木さんが終始男の子の“気持ちに寄り添う”ことを大切に子どもと関わっていたことがよく分かります。青木さんに気持ちを受け止めてもらって、男の子は安心して未知の世界に踏み出しているように見えました^{注1}。一方、青木さんも、自分を受け入れて安心して世界を広げている男の子の姿に接して、保育の楽しさや魅力を実感しているように見えました。

注1 保育者の対応と子どもの心の育ちの関係については、拙著「保育・教育実習での学びと支援」（小竹、2015）も併せてご参照下さい。保育者が子どもの気持ちを受け止めることで、その子は人を信頼し、自信を持って自分を表現し、安心して生活できるようになります。そして、このような信頼・自信・安心といった豊かな心が育つと、子どもは自分から世界を広げることができるようになります。

6. 優しい子ども達

私が初めて「おひさま保育園」を訪問したのは、夏の暑い時期でした。その時、子ども達の優しさを感じさせられた出来事がありました。

子ども達がリズム体操をしている様子を見せてもらった時のことです。子ども達は休憩時間に、持参した水筒のお茶を飲んで水分補給をしていましたが、その中のある男の子が私に「おちゃどうぞ」と自分のお茶を差し出してくれました。また、私が訪問を終えて帰ろうとした際には、子ども達が集まってきて、園庭に咲いていたひまわりの花束をプレゼントしてくれました。

別の日に訪問した際も、昼食時に子ども達がよく自然に友達の食器を用意したり、おかずを運んだりしている姿をあちこちで目にしました。

6-1 職員間の助け合い

「おひさま保育園」の子ども達の優しさは、一体どこから生まれてくるのでしょうか。その答えの一つを、青木さんが以下のように教えてくれました。

「以前、小竹先生の授業で、『自立するということは何でも自分一人ですることじゃなくて、周りに助けを求めたりすることも自立することの一つだよ』^{注2}と教わりましたよね。そういう事が『おひさま保育園』の職員間にもあって、職員の誰かが悩んでいた、困っていたら、他の職員がすぐに気付いて、手伝ってくれたり、一緒に考えてくれたりしています。子ども達は普段から職員が助け合って保育している姿をたくさん見ているから、困っている子がいたら自然と助けることができるのだと思います」

子ども達は大人を見て育ちます。相手を思いやることができる優しい子どもに育てほしいと願うならば、大人同士がそのような優しい関係を築くことが大事だということを変えて教わりました。

6-2 「おひさま保育園」の子ども像

もう一つの答えは、「おひさま保育園」の「子ども像」の中に見つかりました。以下に、「おひさま保育園」が目指す子ども像についてホームページより転載します。

この「子ども像」から、「おひさま保育園」では、子ども達が自分を大切に思う気持ちや仲間を思いやる気持ちを育むことを願って、保育士が子ども一人ひとりの思いを丁寧を受け止める保育を目指していることが分かります。1-4でも記したように、誰かに気持ちを受け止めてもらった子は、人の気持ちを受け止めることができるようになるのだと思います。

優しい子ども達や職員に囲まれ、青木さんもまた安心して子どもの気持ちを受け止めることができたのだと思います。

注2 拙著「子供達の思いを探して」(1996)所収。

環境のなかで、仲間とともに全身を使って遊び、遊びの中で豊かな人間性や創造性を育み、さらに友達と意見を交わしながら自分の考えをまとめ上げていくことを大切にしていきます。

子ども達は、これから様々な経験の中で現実の厳しさにぶつかり、自分の力で乗り越えなければならない時に会います。そんなとき支えになるのは、やはり健康な体と心です。食は心とつながりあう大切な営みとし、保育と給食を、車の両輪として大切に取り組みます。今、子どものなかで、自分に自信が持てない子が少なくないと言われています。子どもにとって、今の自分のありのままを受け止められる安心感がなによりも大切だと思います。そこで子ども一人ひとりの願い、思いに寄り添い、失敗ながらも安心してゆっくりと達成感を積み上げていける場としての保育園にしていきます。

園長 武藤 孝子

ふざかしおひさま保育園の子ども像

- ☆自分を大事に思い、自分に自信の持てる子
- ☆友達といっしょに生活を楽しみ、友達を大事に思う子
- ☆さまざまな体験を通して粘り強く考えて遊びをつくりあげる子
- ☆食事を楽しみ健康な体と心の子

ふざかしおひさま保育園では、上記のような「子ども達をこんなふう育てたい」と願う『子ども像』を描き、それらを念頭に保育を進めていきます。乳幼児期の生活を通し、自分を大切に思えること、つまり自己肯定感をしっかり太らせることは、自らの人生を自分らしく主体的に生きていくための土台となり、また他者の思いを尊重できる力につながっていきます。緑豊かな

7. 「おひさま保育園」での最終日

—散歩に同行する—

青木さんの「おひさま保育園」での契約が終了する最終日(2014年8月29日)、私は再度「おひさま保育園」を訪問し、彼女が保育している様子取材しました。その日の午前中は、0歳児クラスの子供達と近所の散歩に出掛ける予定だったので、私も同行させてもらうことにしました。

以下に、散歩の様子を経過に沿って写真で紹介します。写真には、その時々のお気付きや考え等を添えました。青木さんも、各場面での思いを書いています。写真や文章から、青木さんを初めとする保育士の皆さんが、いかに子ども達の気持ちを一番に考えながら保育しているのかが伝わってきます。



写真1 子ども達を車に乗せて散歩に出る

保育室で「お散歩（外）にいこう！」と声を掛けると、柵に入っている自分達の帽子を指差し「ウーウー（早く行きたいよ〜）」とアピールする子がいました。0歳児の赤ちゃんでもしっかりと意思があり、指差しなどで一生懸命に自分の気持ちを伝えてくれます。そんな思いを一つ一つ丁寧に受け止めてあげたいですね。（青木）



写真2 子どもが見ている物を同じように見る

ベビーカーを押している時は、「今子ども達が何を見て、何を思っているのかな？」と考えながら子ども達の表情を見ていました。この時は、オレンジ色の花を見ている子がいたので、ベビーカーを止めて「お花きれいだね〜」などと声を掛けていました。（青木）



写真3 道端の草花を摘んで見せる

たんぼぼの綿毛を見て、一瞬体を前に出した子がいたので、「もっと近くで見たいのかな？ 触りたいのかな？」と思い、摘んで近くで見せてあげて実際に触れさせてあげたりしました。（青木）



写真4 たんぼぼの綿毛を吹く

たんぼぼの綿毛に触れるのが嫌そうな子もいたので、優しく綿毛を吹いて見せてみました。すると、ふわふわと飛んでいく綿毛を見てにっこりと笑い、「フー」と吹くまねをしていました。（青木）



写真5 学童保育の子ども達が集まってくる

地域の皆さんは「おひさま保育園」の子ども達が大好きで、保育園が地域の人に愛されている印象を持ちました。それは、保育士の皆さんが地域の人との繋がりを大切に考え、普段から挨拶や声掛けをたくさんしてきたからだと思います。(小竹)



写真6 抱っこことあんよ

抱っこが良い子は抱っこで行動したり、「自分で歩きたい！あそこへ行ってみたい！」という思いのある子は自由に探索できるよう見守ったりと、一人ひとりの思いに合わせて楽しんでいました。傍で見守ってくれている保育者がいるからこそ、子どもは安心して周りに目を向けることができるのだと思います。(青木)



写真7 大人もはいはいする

土がどんな感触なのか、四つ這いの子の目線からはどんな景色が見えているのか気になったので、真似をしていました。また、少し前に土の感触が嫌で歩けなくなってしまった子がいたので、その感触を確かめる意味もありました。(青木)



写真8 小竹も抱っこする

普段人見知りする子ども達も、小竹先生のごことは自然と受け入れて、驚きました。田んぼ道、裸足で土の感触が不快で動けなくなってしまった男の子がいた時、小竹先生は距離を取ってそっとしゃがみ込んでいましたよね。すると、男の子は自然と手を差し伸べて抱っこを求めています。驚きました。子どもは正直です。この人ならきっと受け止めてくれるっていうことを感じ取るのですね。先生に抱っこされて心地良かったのでしょうか。気持ち良さそうに眠っていましたね。また学ばせて頂きました。(青木)



写真9 花を触って見せる

子どもが見た物に大人も関心を示し、言葉を掛けるだけでなく、立ち止まって大人が触って見せてから子どもにも触らせていました。子どもが始めた行為の中に子どもの心があります。青木さんをはじめ保育士の皆さんが、そんな子どもの気持ちを大切に受け止めているから、子ども達は安心して未知の世界に踏み出していけるのだと思います。(小竹)



写真10 子どもも花を触る

咲いている花を指差して教えてくれた子がいました。そんな子どもの“伝えたい”という思い(表情や行動)を敏感にキャッチし、一つ一つ丁寧に受け止め、代弁したり共感したりしていくことで、“伝える事の楽しさ”を知り、そんな経験の積み重ねが言葉を育てていくのだと思います。(青木)



写真11 給食室にあいさつ

「いってらっしゃい」と見送ってくれる異年齢児や職員達。「おかえり〜。お給食できてるよ〜」と迎えてくれる給食室。子ども達にとっても私にとっても「おひさま保育園」は家族みたいな場所なのです。(青木)

散歩中、青木さん達は常に子どもの目線や表情や動きから気持ちを考え、声を掛けたり、援助をしたり、励ましたりしていました。散歩に同行して最も印象に残った場面は、青木さんが土の感触や子どもの気持ちを知ろうとして、手足が汚れることも気にせず子どもと同じように土の上を這っていたところです(写真7)。子どもが見ている物を同じように見て、子どもがしている事を同じようにやってみることで子どもの心に近付くことができます。大人にしっかりと気持ちを受け止めてもらって、子ども達は安心して未知の世界に踏み出していました。前述したように、保育者が子どもの気持ちを受け止めることで、子どもは信頼・自信・安心といった心を育て、このような心が育つと、子どもは自ら世界を広げていくことができるようになります。

青木さんは、子ども達はもちろん職員の方々や地域の人達との心の触れ合いを大切に、日々保育していました。青木さんもまた、多くの方に支えられて保育の世界に踏み出し、広げることができたのだと思います。

8 おわりに

「おひさま保育園」の子ども達は、大人にしっかりと気持ちを受け止めてもらうことで、安心して未知の世界に踏み出していました。4年間保育から離れていた青木さんもまた、「おひさま保育園」で園長先生を初め職員の方々に気持ちを受け止めてもらったり、子ども達から元気や感動をもらったりしながら、生き生きと保育の世界を楽しんでいました。子どもも大人も、いろいろな人と気持ちを受け止め合うことで、すなわちいろいろな人と心を繋げることで、不安や葛藤を乗り越え頑張ることができるのだと思います。

青木さんが保育士として成長する過程には、本人の努力はもちろん、多くの方々の教えや支えがあったのだと思います。その中で、私が彼女の力になりえたことは僅かですが、逆に私が彼女から教わり、勇気付けられたことはたくさんあります。学生だった青木さんは、実習エピソードを通して、学生から学ぶことの大切さを私に気付かせてくれました。また、「おひさま保育園」で生き生きと保育する青木さんの姿に接して、これまで学校で教えてきた「子どもの気持ちに寄り添う保育」が間違っていなかったことを確信することができました。

今回の取材を通して、保育士が子どもや職場の同僚と気持ちを受け止め合って共に育つ関係であるように、教員と学生もまた、互いに学び合い、共に育つ関係にあることを再認識しました。そして、教員と学生の共育的關係は、学生の卒業後も保育士としての成長を見守り続けることで、より確かなものに深めることができるのだと思います。

※本文中の写真や文章に関しては全て、青木さん及び「ふざかしおひさま保育園」園長武藤孝子先生の承諾を得て掲載しています。快諾して下さったお二人に心より感謝致します。また、文章に添えられた素敵な挿絵は、青木さんが描いてくれました。

引用文献

- 青木沙織・小竹利夫(2009)「実習のエピソード」
障害児教育学研究, 第13巻 第2号, pp.11-13.
- 小竹利夫(1996)『子供達の思いを探して』
障害児教育学研究, 第3巻 2号, モノグラフ1.
- 小竹利夫(2008)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2009)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2010)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2011)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2012)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2013)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2014)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2015)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2016)『心の触れ合いを求めて』
実習エピソード報告集, 佐野短期大学小竹研究室.
- 小竹利夫(2015)『保育・教育実習での学びと支援—エピソードでつづる心の育ち合い—』佐野短期大学.
- ふざかしおひさま保育園ホームページ
http://schit.net/hiramatsu_aijikai/?page_id=36